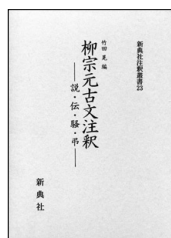


柳文研究に大きな突破口

下定 雅弘



A5判
512頁
新典社
[本体15800円 + 税]

「あとがき」によれば、本書の訳注の検討会（「読書会」）は、二〇〇三年五月に始まり、二〇一二年二月まで、合計八〇回開かれ、前後合わせて二七名が参加したという。まさに、「老・壮・青」の叡智を結集した労作である。

読書会では「中国の古典の文章を参加者の衆知を結集して可能な限り精密・精覈に読む」ことを最大の目的とし、合わせて「漢文訓読の学習」をもねらいとしたとのこと。

本書は「はじめに」「柳文」「説」「伝」「騷」「弔文」「概説」（以下「概説」）、「訳注篇」「参考文献」「附録」「あとがき」「索引」「執筆者紹介」より成る。作品には、「厳密に言えば」「古文」ではなく、「騷」体と言ふべきものが一三篇収録されている（「はじめに」）。

本書の編集は竹田晃氏（以下、敬称を略す）に由り、「はじめに」「あとがき」を記している。「訳注篇」及び「附録」の執筆者は以下の通り（氏名の読みのアイウエオ順）。相野谷智之（執筆篇数は訳注「以下」「訳」「二、以下同じ」・市川桃子（附録「以下」「附」「一」・上原究一（訳二、一篇は高芝と共著）・遠藤星希（訳三、附二）・大野公賀（訳二）・大村和人（訳二）・梶村永（訳二）・黒田真美子（概説二）・古田島洋介（附二）・周重雷（訳三）・詹滿江（附二）・高芝麻子（訳六、一篇は上原と共著）・田中智行（訳二）・福田素子（訳五、附二）・溝部良恵（訳二）・山崎藍（訳四）。「訳注」は文章三〇篇。柳宗元の集（四五巻本）の巻一六「説」の一篇全て（天説・鶴説・祀朝日説・捕蛇者説・禱説・乗桴説・説車贈楊誨之・謫龍説・復呉子松説・罷説・親八駿図説）、巻一七「伝」の六篇全て（宋清伝・種樹郭橐駝伝・童区寄伝・梓人伝・李赤伝・蝨蟻伝。題のみの一篇を除く）、巻一八「騷」の一〇篇全て（乞

竹田晃編

柳宗元古文注釈—説・伝・騷
新典社注釈叢書23

巧文・罵尸虫文・斬曲凡文・宥蜺蛇文・憎王孫文・逐畢方文・弁伏
神文・翹螭文・哀溺文・招海賈文」及び卷一九「弔贊箴戒」の「弔」
の全て（弔畏弘文・弔屈原文・弔樂毅文）である。

以上三〇篇のうち、「天説」「捕蛇者説」「觀八駿図説」「宋
清伝」「種樹郭橐駝伝」「童區奇伝」「梓人伝」は、星川清孝『唐
宋八家文読本二』（明治書院）、清水茂『唐宋八家文』（朝日新
聞社）、寛文生『唐宋八家文』（角川書店）等に訳出されているが、
多くは旧来、現代語の訳注が提供されていなかったものであ
り、これだけでも、柳宗元の文が手軽に読めるということど
大きな福音である。

「附録」は、「一 関係資料注釈」として、新旧『唐書』の「柳
宗元伝」と劉禹錫「祭柳員外文」、「二 柳宗元集の版本につ
いて」「三 訓読一般および柳文の訓読について」「四 柳宗
元年譜」より成る。「参考文献」は、著書（日文四一点・中文
二一点、論文（日文二八点・英文二点）、が訳注篇末尾に添えられ、
巻末の「索引」は「人名」「地名」「書名」「篇名」の四種を
備えている。

以下、内容について紹介するが、紙幅のついで「概説」
と「訳注」にとどめる。

黒田真美子「概説」は、三三頁に亘る訳注諸篇への懇切な
ガイド。「説」「伝」「騷」「弔文」それぞれの文体の性質と、

各作品がその系譜の何を継承し、何に力点を置いたのか、何
を創造したかを述べるもの。「おわりに」の著者のまとめは
次のようである。柳宗元は、「説」では、絶えようとしてい
たこの系譜に韓愈と共に新たな命を吹きこんだ。「伝」では、
「梓人伝」「種樹郭橐駝伝」は大工の棟梁と植木職人に托して
政治論を展開し、「李赤伝」「蝥螋伝」は、寓意を超えて人間
の本質にせまる高い文学性を示し、伝統を継承しつつ斬新な
試みをしている。「騷」では『楚辞』の形式を全て採用する
という意欲を示している。「弔文」も『楚辞』と深く関わっ
ていて騷体を用いる。

なお「罵尸虫文」については、吹野安氏に論があり、騷体
文学ではなく祝辞系文学、『詩経』の「巷伯」「雲漢」等の影
響が強いという。筆者の見解は如何？

訳注について。訳注は、各作品について、「要旨」が冒頭
に配され、以下、「原文」「書き下し」「現代語訳」「注解」が
この順で、おおむね分段して記述されほとんどの作品に「補
説」が加えられている（童區奇伝「梓人伝」「斬曲凡文」「哀溺文」
「弔樂毅文」にはない）。「原文」には返り点が施され、書き下
しは総ルビで、旧仮名を用いている。

「可能な限り精密・精覈に読む」と言われる通り、訳は精
密でこなれており、注解も、文の要になる語・わかりにくい

語について、極力漏れないように努めている。底本（『新刊増広百家詳補註唐柳先生文』影印本）・蔣之翘本等にはない多数の語に注がつけられており、大変読みやすく有用である。時に底本よりも適切な典拠を挙げている。

訳注諸篇については、評者が学び考えさせられた主な問題を記すことで紹介に代える。

一、天人相関論に対する柳宗元の態度、また柳宗元を合理主義思想の持ち主とすることの適否。この問題が最も明確に示されるのは「天説」だが、それだけでなく、「禘説」「罵尸虫文」「逐畢方文」「螭螭文」なども、この問題に関わる。

「禘説」の「禘」は、その年の作柄を神に報告する祭祀で、災害があつた地域では行わない。宗元は、この祭の目的が神という実体のないものに賞罰を与えて人間への戒めとすることにあるとし、天災は偶然によって降りかかるもので、人間の行いに天地が感応するという説を否定している。

「罵尸虫文」は、道士が、腹中に住む尸虫の讒言を天帝が聞いて、人が罪で流されたり、病にかかるのだというのに対して、「柳子特に信ぜず」と明言した上で、「来たれ、尸虫」と、尸虫の悪を糾弾し、天帝はきつとお前を処罰し放逐するだろうと論じている。

「逐畢方文」の畢方は、『山海経』に登場する火災をもたら

す鳥。元和七、八年の夏、永州では火災がたびたび起こった。宗元は民が畢方という怪鳥が災いをなしていると噂しているのを聴き、畢方を追い払うためにこの文を書いた。お前が悪事を働き続ければ、天帝はきつとお前たちを滅ぼす、ただちに去れと激しい調子で述べている。補説にいう、「この文は「罵尸虫文」と同じく、人々に害をなす想像上の生物と、それを罰すべき天帝の姿を描く構成を取っている」。その通り。宗元は、「皇は亶に聡明にして、此の下地を念う」と、天帝を聡明で、民を思う存在であるはずだと述べている。それは、火災をなんとかして止め、民に平安をもたらしたいとの宗元の強い思いの表現でもある。

「螭螭文」は、役人を淵にひきずりこみ殺した螭を糾弾し、山川を掌る神がいるのなら、怪物を処罰してほしいと訴える文。これも、「吾聞く、凡そ山川には必ず神有り之れを司ると。抑そ是れ有りや」と述べて、山川の神に訴えている。神の存在を全く信じているわけではない。悪事を働く者への怒りが山川を司る神への期待の表現になっている。

以上、ここは宗元の天や神に対する態度・思想についての論を展開する場ではない。本書のこれらの文は、この問題を探究していく重要な資料になるにちがいない。

二、貶謫の苦悩の発散と昇化。本書の多くの文は、貶謫が

もたらず怒りや懊悩を寓している。「鵲説」(捕らえた小鳥で脚を暖めた後、小鳥を逃がしてやるはやぶさの話)・「謫龍説」(地上に下りた龍の化身である女の話)・「罷説」(他者の力ばかりを頼りにして命を落とす男の話)・「宋清伝」(目前の利益を度外視する薬の商人の伝)・「李赤伝」(トイレを天国だと思って死ぬ男の伝)・「蝨蠅伝」(荷物を背負い過ぎて死ぬ虫の伝)・「乞巧文」(天帝の孫娘に「巧」を与えてくれるように訴えるも結局は「拙」を貫く決意を述べる文)・「斬曲几文」(曲がった材で作った机の悪影響を述べる文)・「宥蝮蛇文」(毒蛇の悪を記した上でそれを宥す文)・「憎王孫文」(乱暴で利己的なサル王孫を糾弾する文)・「弁伏神文」(毒物を見抜けなかった自分を嘆く文)・「哀溺文」(富や名誉を大事にして命を落とす人間を批判する文)・「招海賈文」(海に出た商人が帰ってこないのを呼び戻そうとする文)等、全てそうである。これらには永州での、宗元の様々な苦悶の克服のための葛藤が見られる。詩に歌われる悲哀より、はるかにリアルで率直で生々しい。「宥蝮蛇文」の補説に、松本肇「柳宗元研究」(創文社)に「敵に対する憐憫や宥恕は処罰より重い裁きである、という反語の中に憤怒を封じ込めた」とあるのを引くのは興味深い。宗元は憐憫によって、自己の憎悪の感情を軽減・昇化させたのではないだろうか。

三、柳宗元の崇高な魂。「鵲説」「乗桴説」「謫龍説」等、

多くの文に宗元の高潔な矜持を見る。とりわけ「弔屈原文」、「弔樂毅文」にその感が深い。「弔屈原文」の「補説」に、賈誼と宗元が、両者共に屈原の正義を尊びつつも、賈誼は屈原が自殺に到ったのは彼自身の罪だと非難し、宗元はあくまで屈原を正しいとしている、その評価のちがいに言及するのは、宗元の姿勢を鮮明にしている。

以上、紙数のつごうで、評者が学び考えた主なことのみを述べた。訳注の細部、附録については別稿に譲る。

韓柳といわれるが、韓文三百数十篇(『順宗実録』を含まない)が全て訳されているのに対して、柳文全四百数十篇、その訳注はいまだ寥寥たるものである。柳宗元の他の文巻についても陸續と訳注が出ることを望む。詩巻の全訳もほしい。評者自身への叱咤をも含めてそう思う。本書が、その大きな突破口となることを期待する。

【附記】なお訳注に時おり分かりにくい点や疑問があり、ご教示を請いたいのが紙幅が許さない。僭越ながら、卑見をHP「下定雅弘の中国文学の回廊」に公開しているので、関心のある方は参考にしてくださいければ幸いです。

(しもさだ・まさひろ 岡山大学名誉教授)